

[原著]

他職種との協働に基づく心理援助活動の展開

筑波大学大学院人間総合科学研究科：新井 雅
筑波大学人間系：庄司 一子

Psychological help activity based on the collaboration with other professions

Masaru Arai and Ichiko Shoji

はじめに

現代では、実に多種多様な対人援助職が各々の専門性に基づいてヒューマン・サービス活動を行っている（安部, 2006；Harris, Moloney & Rother, 2004）。中でも、近年、人々のメンタルヘルス上の諸問題から、教育、医療・保健、福祉、産業等の諸領域において、臨床心理士に代表される心理専門職の役割が期待されている。

しかし、ポストモダンと呼ばれる現代社会の特徴を背景に、現代の人々は複雑化・多様化した問題や課題、ニーズを抱えている。これらの問題や課題に対して効果的かつ適切な援助を行うには、個々の専門職が個別に支援に当たるだけでなく、様々な専門性を持った専門職の連携や協働に基づく援助活動が重要である（松岡, 2009）。したがって、どのような社会領域であれ、多様な対人援助職の中で心理専門職がどのような役割を果たす必要があるのか、他職種と協働しつつ、自らの専門性を発揮するためには、どのようなことが求められるのかを検討することが重要である。

そこで本研究では、大きく3つの観点に基づく検討を行う。第一に、対人援助職によるヒューマン・サービス活動の定義や活動の展開、特徴について整理する。多様なヒューマン・サービス活動が行われる中で、心理専門職の果たす役割を検討するには、まず、対人援助職そのものの現状を整理することが重要である。第二に、多様な対人援助職が活動を行う中

で、他職種と協働しつつ、心理専門職はどのような役割・機能を果たす必要があるのかを検討する。第三に、心理専門職が他職種と円滑な協働を行うために必要とされる今後の実践的、研究的な方向性について考察を行う。

現代社会の問題と

対人援助職によるヒューマン・サービス活動

1. 社会の移り変わり与人々の抱える問題やニーズ

人々が生活する社会は、大きな時代の流れとともに、移り変わる性質をもつ。そのような社会の中で、人々は常に穏やかで安定した生活ができるわけではなく、それぞれの時代の社会情勢に特徴的な歪み、困難、苦悩などを抱えながら生活を送ることが少なくない。

McLeod (1997) は、明確に区別することは難しいと指摘ながらも、大きな社会的な変化を、3段階に分けて捉えている。第一段階は伝統社会として特徴づけられる。人々は小規模な地域で暮らし、地域共同体、家族志向の生活習慣を基本とし、他者とときわめて近接に暮らしながら、宗教や神話に基づく規律に従って生活していたとされている。第二段階は、近代社会である。ここでは、科学とテクノロジーが大きく発展し、産業化が進み、人々の生活様式は都市的なものへ変化することとなった。地域共同体、家族志向の生活から、個人の幸福や価値性を重視する個人主義的な生活が中心となり、また神

話や宗教に代わって、科学的な客観性や進歩への信頼と合理性が人々の心を占めるようになった。第三段階であるポストモダンと呼ばれる今日の現代社会においては、グローバル化された地域社会の中で、人々は無数ともいえるライフスタイルの在り方が提示されながら生活を送っており、情報処理労働が中心的な社会となっている。

以上から、現代では、伝統社会、近代社会を経て、ポストモダン社会に移り変わっている。このような中で、人々は、家族形態の変化、人間関係の希薄化、地域コミュニティの結びつきの減少、氾濫する情報の数々、雇用の不安定さなどによって、様々なメンタルヘルスの障害や不適応問題などを抱えながら生活を送っているとされている（藤本，2002；石原，2008）。

2. 対人援助職によるヒューマン・サービス活動

このような社会の中で、苦悩を抱えながら生活する人々を支える職種として、ヒューマン・サービス活動を行う様々な対人援助職が重要な役割を果たしている（安部，2006；Harris et al, 2004）。それぞれの対人援助職は、問題や苦悩を抱えている人々を、各々の専門性を用いて援助する。橋本（2009）を参考にすると、対人援助職には、たとえば、医師、弁護士、看護師、教師、社会福祉士、臨床心理士などがあげられる。すなわち、このヒューマン・サービスは、特定の職種に限定されたものではなく、「人間生活にかかわる広大な諸分野を包摂した言葉」（宮本，2004）である。現代では、対人援助職によるヒューマン・サービス活動が社会システムの中に適切に位置づけられることによって（望月・中村・武藤・サトウ，2010）、人々は問題や苦悩を抱えながらも、様々な支援や援助を受けながら支えられている側面がある。

このヒューマン・サービスについて、加茂（1998）は「基礎的理論や技法において多くの共通点を有する、ソーシャルワーク、カウンセリング、教育、司法等の分野での対人援助」と述べ、宮垣（2003）は、「対人的・対面的に

提供するサービスのうち、精神や身体等の人間の存在に直接かかわるサービス、すなわち、福祉、医療、保健、教育、援助・支援、権利擁護、相談などにおける対人的な支援サービス」と述べている。石隈（1999）は、「個人の well-being の向上を目的として、人が人に対して行う活動であり、教育、医療、福祉、リハビリテーションをさす」とし、「ヒューマン・サービスの従事者は、自らの教育訓練と経験から獲得した専門性に基づき、サービスの受け手の幸福に役立つ（人生の一コマを豊かにする）ことを目指した活動を行う」と述べている。

これらを踏まえると、ヒューマン・サービスとは、様々な社会領域において、多様な対人援助職が、自らの専門性に基づき、困難やニーズを抱えた人々に対して援助を行う活動の総称であると考えられる。このようなヒューマン・サービス活動を行う対人援助職は、単に、ある特定の専門・学問分野に精通しているというだけでは十分ではない。長期間の教育訓練を経て資格を得ること、仕事へのコミットメントを強く有し、適切な倫理的意識を持ちながら社会的活動を行うという、「専門職（profession）」と呼ばれるにふさわしい活動を行うことが求められる（橋本，2006；金沢，2002）。

3. ヒューマン・サービス活動の展開と専門分化の問題

ヒューマン・サービス活動は、社会構造の複雑化や人々の生活スタイルの変化、近代における科学技術の進歩に伴って、もともとと家族や地域共同体が担っていたものが、外部化され公共サービス化されたものであるという見解が指摘されている（宮垣，2003）。このように外部化され公共サービス化されたヒューマン・サービス活動は、より一層の社会構造の複雑化と専門技術の進歩に伴って、専門職内や専門職間の専門分化（個々の専門職の知識・技能が複雑化、高度化し、専門性が細分化されること）が促進されてきた（広井，2000）。

対人援助職の専門分化が促進されるということは、より高度で専門性の高い援助やサービ

スの人々に提供できるという利点もある。しかし、専門分化が促進された個々の専門職によるヒューマン・サービス活動では、援助対象となる人々が細分化されて捉えられてしまい、人間本来の多面性、全体性を踏まえた援助を行うことが困難になる欠点も指摘されている（Eriksen, 1981；阿部, 2006）。個々の専門職が各々の専門分野に精通するほど、狭い専門領域に閉じこもることとなり、他の領域や社会全体への関心を喪失し（中野, 1981）、結果的に異なる専門性を持つ職種との葛藤や対立、異分野摩擦を生み出す危険性がある（福山, 2009；藤垣, 2003）。広井（2000）も、人間という存在が持つ多面性や全体性にも関わらず、現在の学問の体系は専門分化が進みすぎケアの全体像が見えにくくなっていること、あらゆる学問も人間のある部分だけを切り取って他を切り捨てて見ていることから、特定の専門分野のみにしばられて物事を考えていると、本来求められるケアの姿とは程遠くなってしまふ懸念を述べている。

4. 対人援助職における協働的な援助活動の重要性

このような中で、人々の抱える問題をより多面的に理解し、援助対象者の主体性やニーズを踏まえながら、複数の専門性を持った専門職が参加してサービスを構成すること、すなわち、統合的なヒューマン・サービスを行う必要性が強調されている（Eriksen, 1981；宮本, 2004；藤川, 2007）。さらに、この実践を可能にするためには、それぞれの対人援助職が、各々の専門性を個別に発揮するのではなく、相互に協働しながら、援助活動を展開することが重要となる（松岡, 2009）。

この協働について、宇留田（2004）は「異なる専門分野が共通の目標の達成に向けて、対等な立場で対話しながら、責任とリソースを共有してともに活動を計画・実行し、互いにとって利益をもたらすような新たなものを生成していく協力的行為である」と述べている。すなわち、統合的なヒューマン・サービスを行うには、この協働性を重視しながら、異なる分野の専門職

が、円滑なコミュニケーションをとり、共通の目標をもって、それぞれの専門的な知識と技能に基づいた援助を行うことが重要となる。

もちろん、堀越・堀越（2002）がまとめているように、個々の対人援助職に広く共通する専門的素養を検討することは、ヒューマン・サービス活動を行うための資質、姿勢、態度を明らかにし、様々な職種の教育訓練に生かすためにも重要である。同様に、原田（2004）による、多様な領域を包括する専門的相談の援助モデルの構築を目指す試みも、対人援助職全体としてのより良い援助の在り方を検討する意味で重要な意義がある。

しかし、専門分化が進んでいる現状では、各々の専門職に独自の特徴や限界をわきまえて、援助を展開することが必要となる。時には自己の専門性を発揮し、時には他職種と協働し、その専門性を補い合いながら、人々を援助する意識や姿勢をもつことが重要とされている。

ヒューマン・サービス活動における 心理専門職の役割

1. メンタルヘルスケアの担い手としての心理専門職

現代では、人々のメンタルヘルスの問題も、重要な社会的関心事となっている。たとえば、堀越（2002）は、世界保健機関（WHO）による人々の健康状態に関する調査結果を踏まえて、世界的に心のケアの必要性が増大する可能性を指摘している。同様に、高橋（2011）も、日本において臨床心理学が急速に注目されてきた背景として、1990年代の心の時代の到来があると述べている。すなわち、当時バブル経済で享受された物質的、経済的な豊かさの陰で忘れられてきた心への注目が集まり、世の中の様々な問題が「心の問題」として理解され、その解決のために、臨床心理学という学問に期待が集まった経緯を述べている。実際に、一人ひとりの心の健康状態は、個々人の内面的な葛藤や苦悩として問題視されるばかりでなく、周囲の人間関係、家庭生活、社会組織等への影響を含め

て、社会的・経済的な規模で影響を及ぼす（法政大学大原社会問題研究所，2003）。したがって、個々人のメンタルヘルス上苦痛を軽減する意味だけでなく、社会的な安定・発展を図る上でも、メンタルヘルスケアに関わる心理専門職の役割は重要である。

また、ヒューマン・サービス活動が、家庭や地域共同体で担われてきた機能が外部化し、公共サービス化されてきたものであるという見解は先に述べた。これと類似して、心理専門職によって行われる心理療法も、かつては人々によって執り行われてきた癒しの行為が時代の流れとともに変容したものであることが、一つの見解として示されている（McLeod, 1997）。すなわち、過去の伝統的な社会では、人々は、家庭や身近な地域において、人と人との結びつきや支え合い、あるいは宗教的な思想によって、メンタルヘルス上の苦悩や困難を乗り越えてきた。しかし、社会構造や家族・地域形態、生活スタイルの移り変わりに伴って、そのような伝統的な癒しの行為が、近代産業社会の価値やニーズを取り入れて変容した結果、現代における癒しの一形態として、心理療法が社会的に求められるようになったと考えられている。

対人援助職によるヒューマン・サービス活動の展開と同様、心理専門職による心理援助も、社会の移り変わりに伴ってその重要性を増し、現代社会の中で求められる活動になってきた経緯がある。

2. 他職種との協働に基づく心理的援助活動の重要性

先述したように、現代では、人々への効果的かつ適切な援助のために、協働に基づく統合的なヒューマン・サービス活動が求められている。したがって、心理専門職も、様々な専門性を持つ他職種と円滑に協働しながら、自らの専門性を発揮する姿勢が問われる。

また、他職種との協働が求められるようになってきた背景として、心の問題の捉え方が変化している点も指摘されている。すなわち、生物・心理・社会モデル（Engel, 1980）に基づ

いて、心の問題を、より幅広いシステムの中に位置づけて捉える傾向が高まっている（宇留田, 2004）。このモデルは、精神的・身体的疾患などの問題が、生物的・心理的・社会的要素が多元的に重なって発生すると考えるものであり、現在の心理的援助活動において重要な枠組みの1つとされている（黒沢, 2010；村瀬・飯田, 2008；Mash & Hunsley, 2007）。世界保健機構（WHO）による国際生活機能分類（ICF）（WHO, 2001）においても、人々の疾患・障害を、心理機能・構造（生物レベル）、活動（個人レベル）、参加（社会レベル）を含んだ「生活機能」として捉えることが推奨されているが、この観点も生物・心理・社会モデルに立った統合モデルである（上田, 2008）。

このように問題を抱えている事例を、生物、心理、社会的側面から捉えることで、人々の生物学的側面（Bio 面）は医師や看護師や理学療法士、心理的側面（Psycho 面）は臨床心理士や精神科医師、社会的側面（Social 面）は教師やケースワーカー、ソーシャルワーカーが中心となって対応を行うといったように、様々な専門性を持った他職種との協働を展開しやすくなる利点（高橋, 2011）も指摘されている（Figure 1 参照）。このように人々の抱える問題や課題の全体像を踏まえ、他職種と協働しながら心理専門職の果たす役割を考え、援助活動を展開することが必要とされている（宇留田, 2004）。

他職種との協働を促進する要因・条件の探索と心理専門職の養成について

以上のように、様々な対人援助職による統合的なヒューマン・サービス活動が重視されていること、また、心理専門職も他職種と協働するための姿勢を意識して、心理的援助活動を行う必要があることが示された。

しかし、実際に、どのような要因や方略によって職種間の協働的關係が構築されるのか具体的な示唆を示した研究は未だに十分ではないことも指摘されている（藤川, 2007）。したがって、職種間の連携や協働の重要性を指摘す

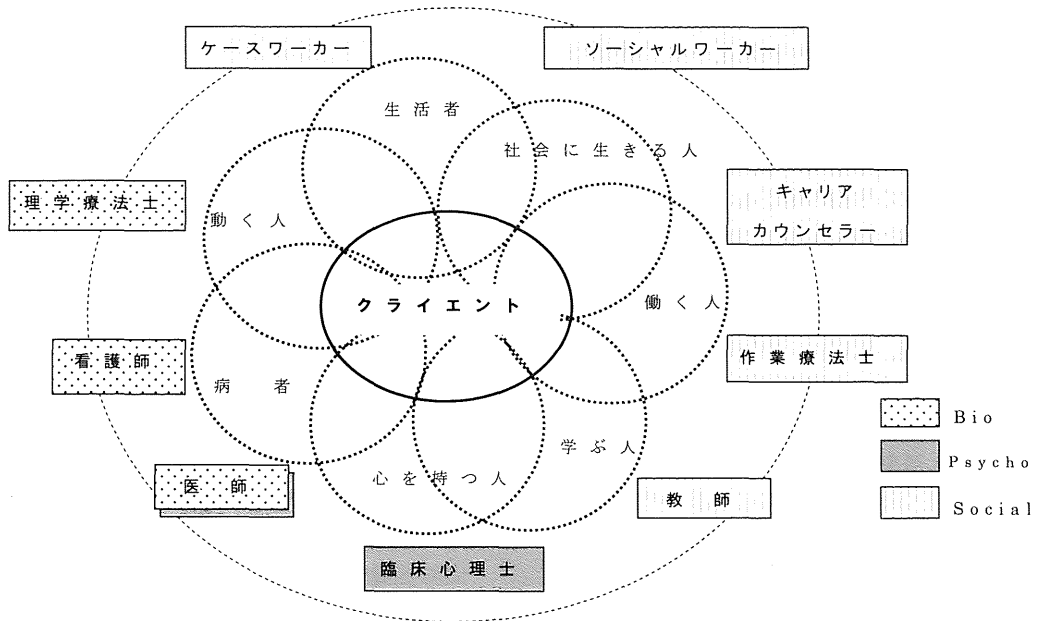


Figure 1 クライエントの多面的な理解と援助のモデル（高橋，2011）

るだけでなく、それが成立するための要因や方略を詳細に検討することは、重要な検討事項になる。

職種間の協働に影響を及ぼす要因には、宇留田（2004）、菊池（2004）、藤井・河合（2012）の指摘を踏まえると、大きく5つあげることができる。すなわち、①社会レベルの要因（政策・制度による支援、人員配置など）、②組織レベルの要因（組織内の運営体制など）、③チームレベルの要因（関係者会議の運営、職種間の連絡・調整など）、④個人間レベルの要因（他職種と人間関係を形成し、チーム内で自らの専門性を活かす能力・姿勢など）、⑤個人内レベルの要因（個々の専門職独自の適性・能力）である。たとえば、学校教育領域を例にとると、スクールカウンセラー（以下、SC）と学校との効果的な協働に関しては次のように考えられる。すなわち、①社会レベルの要因では、SCの採用システム、各学校の実態・ニーズに応じた配置日数・方法を検討すること（文部科学省，2009）、②組織レベルの要因では、学校側の受け入れ体制やSC活用方法の明確化（河村・武蔵・粕谷，2005；土居・加藤，2011）、③チームレベルの要

因では、援助チームの構築（田村，2003）や協働を円滑化するコーディネーションの在り方（瀬戸，2010）などの検討が必要である。④個人間レベルの要因では、心理専門職が教職員と関わる際の姿勢や配慮が重要となり（鶴養，2001；土居・加藤，2011）、⑤個人内レベルの要因では、そもそものSCとしての適性・能力があげられる。このように、職種間の円滑な協働を促進するには、様々なレベルから検討していくことが必要とされる。

さらに、どのような領域であっても、個々の専門職一人ひとりに必要な能力には、次の3点が重視されている。すなわち、「社会人としての基本的な対人関係能力」および「独自の専門性を持つ専門職としての能力」に加え、「多職種協働に関する能力」（様々な専門性を有する他職種と協働する能力）である（高橋，2011；松岡，2009）。特に近年では、「多職種協働に関する能力」の育成が重視されており、実際に、保健・医療、福祉領域を中心に職種間の連携・協働に関する教育訓練の在り方が盛んに議論されている（新井，2006；松岡，2009；紀国谷，2007）。村瀬（2011）によると、これからの心理専門

職には、(1) 生物・心理・社会モデルに則って、(2) 他職種とのチームアプローチを重視し、(3) 適切に心理臨床行為の有用性を示していくことが、どのような活動領域においても大きな課題とされている。心理学研究においても、心理専門職の活動の場が心理療法「室」から社会の現場へと拡大するにつれて、他職種との連携・協働における心理専門職の役割・機能の検討を積み重ねることが求められている(黒沢, 2010; 無藤, 2009)。さらに、心理専門職の養成に関しては、心理専門職独自の専門性を高める教育訓練の在り方を検討すること(乾, 2003; 村椿・富家・坂野, 2010)に加え、異なる専門性を有する他職種と共に社会の中で活動するための知識・技術・態度を高める教育訓練の在り方の検討が、今後ますます求められると考えられる。

引用文献

- 阿部志郎 (2006). ヒューマンサービス論 中央法規出版
- 新井利民 (2007). 英国における専門職連携教育の展開 社会福祉学, 48(1), 142-152.
- 土居正城・加藤哲文 (2011). スクールカウンセラーの職務内容の明確化がスクールカウンセラーと教員の連携促進に及ぼす効果 カウンセリング研究, 44(3), 189-198.
- Engel, G. L. (1980). The clinical application of the biopsychosocial model. *The American Journal of Psychiatry*, 137, 535-544.
- Eriksen, K. (1981). *Human service today 2nd ed.* Virginia. Reston Publication Company. 豊原廉次郎 (訳) (1982). ヒューマン・サービス—新しい福祉サービスと専門職— 誠信書房
- 藤垣裕子 (2003). 専門知と公共性—科学技術社会論の構築へ向けて— 東京大学出版会
- 藤井明日香・川合紀宗 (2012). 特別支援学校高等部の就労支援における関係機関との連携—多機関・多職種連携を困難にする要因の考察から— 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要, 10, 15-23.
- 藤川麗 (2007). 臨床心理のコラボレーション—統合的サービス構成の方法— 東京大学出版会
- 藤本修 (2002). 現代社会とメンタルヘルス. 教育と医学, 50, 568-575.
- 福山和女 (2009). ソーシャルワークにおける協働とその技法 ソーシャルワーク研究, 34(4), 278-290.
- 原田杏子 (2004). 専門的相談はどのように遂行されるか—法律相談を題材とした質的研究— 教育心理学研究, 52, 344-355.
- Harris, H. S., Moloney, D.C., & Rother, F.M. (2004). *Human Services: Contemporary Issues and Trends -3rd ed* Pearson Education, Inc.
- 山崎美貴子 (監訳)・臼井正樹・田中暢子・ヒューマンサービス翻訳グループ (訳). (2009). ヒューマンサービス—現代における課題と潮流— 第一出版
- 橋本鉦市 (2006). 専門職の「量」と「質」をめぐる養成政策—資格試験と大学教育— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 54, 111-135.
- 橋本鉦市 (2009). 専門職養成の日本的構造. 玉川大学出版部
- 広井良典 (2000). ケア学—越境するケアへ— 医学書院
- 堀越あゆみ・堀越勝 (2002). 対人援助職の基礎にあるもの 精神療法, 28, 425-432.
- 堀越勝 (2002). 臨床心理学における統合的活動モデル 下山晴彦・丹野義彦 (編著). 講座臨床心理学 6: 社会臨床心理学 (pp.43-60) 東京大学出版会.
- 法政大学大原社会問題研究所 (2003). 日本労働年鑑第73集 メンタルヘルス問題と職場の健康—その現状と対策— 旬報社
- 石原邦雄 (2008). 社会変動とメンタルヘルス 精神保健福祉, 39(1), 11-15.
- 乾吉佑 (2003). 日本における臨床心理専門家養成の展望と課題 心理臨床学研究, 21, 201-214.
- 石隈利紀 (1999). 学校心理学—教師・スクール

- カウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス— 誠信書房.
- 加茂陽 (1998). ヒューマンサービス論—その社会理論の批判的吟味— 世界思想社.
- 金沢吉展 (2002). 臨床心理学の社会性—下山晴彦・丹野義彦 (編著). 講座臨床心理学 1: 臨床心理学とは何か (pp.155-169) 東京大学出版会.
- 河村茂雄・武蔵由佳・粕谷貴志 (2005). 中学校のスクールカウンセラーの活動に対する意識と評価—配置校と非配置校の比較— カウンセリング研究, 38(1), 12-21.
- 菊地和則 (2004). 多職種チームのコンピテンシー—インディビジュアル・コンピテンシーとチーム・コンピテンシーに関する基本的概念整理— 社会福祉学, 44(3), 23-31.
- 紀国谷恵子 (2007). 国際生活機能分類 (International Classification of Functioning, Disability and Health: ICF) にみた福祉・保健・医療の専門職協働における連携に関する貢献と課題—東北福祉大学大学院総合福祉学研究科社会福祉学専攻紀要, 5, 52-63.
- 黒沢幸子 (2010). 臨床心理学の研究動向および今後に向けて—社会的要請に応える実践のために— 教育心理学年報, 49, 120-129.
- Mash, E.J., & Hunsley, J. (2007). Assessment of child and family disturbance: a developmental-systems approach. In Mash, E.J., & Barkley, R.A (Eds.) *Assessment of Child Disorders*. (pp.3-50) The Guilford Press.
- 松岡千代 (2009). 多職種連携のスキルと専門職教育における課題—ソーシャルワーク研究, 34(4), 314-320.
- McLeod, J. (1997). *Narrative and Psychotherapy*. Sage Publication. 下山晴彦 (監訳)・野村晴夫 (訳) (2007). 物語りとしての心理療法—ナラティブセラピーの魅力— 誠信書房
- 宮垣元 (2003). ヒューマンサービスと信頼—福祉NPOの理論と実証—慶應義塾大学出版会
- 宮本義信 (2004). アメリカの対人援助職—ソーシャルワーカーと関連職種の日米比較— ミネルヴァ書房
- 望月昭・中村正・武藤崇・サトウタツヤ (2010). 対人援助学の可能性—「助ける科学」の創造と展開— 福村出版
- 文部科学省 (2009). 児童生徒の教育相談の充実について—生き生きとした子どもを育てる相談体制づくり—
- 村瀬嘉代子・飯田昭人 (2008). 精神療法—児童期・青年期の統合アプローチ— 精神科治療学, 23増刊号, 82-86.
- 村椿智彦・富家直明・坂野雄二 (2010). 実証的臨床心理学教育における科学者実践家モデルの役割—北海道医療大学心理科学部研究紀要, 6, 59-68.
- 村瀬嘉代子 (2011). 社会からの臨床心理学への期待—臨床心理学, 11(1), 9-13.
- 無藤清子 (2009). 臨床心理学の研究の動向および今後に向けて—研究・実践のためのシステム論的視点と倫理— 教育心理学年報, 48, 130-142.
- 中野秀一郎 (1981). プロフェッションの社会学—医師, 大学教師を中心として— 木鐸社
- 瀬戸美奈子 (2010). 学校におけるチーム援助のコーディネーションに関する研究の動向—関西福祉科学大学紀要, 14, 77-86.
- 高橋美保 (2011). 大学教員として臨床心理学の発展を考える (2)—臨床心理学, 11, 50-55.
- 田村節子 (2003). スクールカウンセラーによるコア援助チームの実践—学校心理学の枠組みから— 教育心理学年報, 42, 168-181.
- 上田敏 (2008). ICF (国際生活機能分類) の理解と活用. 精神療法, 34, 10-19.
- 鶴養美昭 (2001). スクールカウンセラーと教員との連携をどう進めるか—臨床心理学, 1(2), 147-152.
- 宇留田麗 (2004). 協働—臨床心理サービスの社会的構成— 下山晴彦 (編著) 臨床心理学の新しいかたち (pp.219-242) 誠信書房.
- World Health Organization, WHO (2001). *International Classification of Functioning, Disability and Health: ICF*. 障害者福祉研究会 (訳) (2002). ICF: 国際生活機能分類—国際障害分類改訂版. 中央法規出版.